

ポストフェミニズムの時代における「女子」とフェミニズム

荒木菜穂

(甲南女子大学他非常勤講師)

はじめに

むかし、私はフェミニズムというものが苦手だった。オンナであることを「思い知らされる」さまざまな出来事を経験してもなお、声高に（時にはヒステリックに）自分の考えを主張し、男性を糾弾する（ように見える）「フェミニスト」は、自分の感じる「思い知らされ」の解決とは結び付かないと感じていた。おそらくその頃の社会全体（特に女性たち）のフェミニズムへの視線もそのようなものであったと思う。

しかし、ある時、これがフェミニズムであると私が思っていたフェミニズムは、とても一面的なフェミニズムかもしれない、と気づくことがあった。実際、フェミニズムには相いれないさまざまな立場がある。例えば、女性の性的主体性をめぐる問題においても、女性が主体的に性を楽しんだり性的消費を行ったりすることは女性解放であるという立場と、それらは男性中心主義への迎合だとする立場などがある。また、目立った論争があるような違いのみならず、さまざまなフェミニズムのあり方（運動の方法をめぐって、担い手の社会的立場の差異、またはアカデミズム化するフェミニズムへの共感の有無など）において、フェミニズムは一枚岩ではないことをしばしば目の当たりにした。

そのような疑問を持つようになった私は、あえて、いわゆる「古いタイプ」のフェミニズムのグループに、半ば参与観察的な気持ちで参加するようになった。そこで知ったことは、フェミニズムそのものの多様性と、時として衝突しながらも、活動をする中でさまざまな立場の女性のあり方に共感し、視点を増やしていくその豊かな営みであった。活動のかたちにもさまざまなものがあるが、単にある 이슈について行動を起こすというのみならず、それぞれの生活や趣味についてのおしゃべり、お茶や飲み会といった共に過ごす時間もまた、自らのジェンダー的視点や社会への視点をアップデートする、フェミニズム的活動であるように思えた。もっとも、交友関係が貧困な私であっても、「ここ」でなくとも、さまざまな話題でさまざまな人と「おしゃべり」「飲み会」（時として女子会も）をする機会があった。しかしフェミニズムのグループはそれらと比べ、ジェンダー的な決めつけのない、「女性的価値の低い自分」を我慢しなくてよい、安心できる場であった。

つまり、私にとって、フェミニズム的活動は、「女子の文化」であった。中には男性メンバーが参加することもあるが、そこで語られることの多くは「女性の視点」であり、世の男女の「あたりまえ」にたいするオルタナティブな場を女性中心で作ってきたという意味では、私の実感でのみならず、「女子」の営みと位置づけでもよいのではないかと思う。

震災、原発事故、安保法案についての議論などが高まった 2011 年以降の運動、また #MeToo など SNS 上やリアルでの動きといった、新しいフェミニズム的活動や行動の機運が、それまでの活動の担い手とは異なる層の、若い女性たちを中心に高まってきている。さらには、女子学でもさまざまに取り上げられてきたような、これまでの女性のあり方とは異なる、新しい「女子」たちが、女性の「あたりまえ」から解放された存在として、楽しみ、活躍している。性をめぐる「あたりまえ」に声を上げ、社会構造への批判を続けてきたそれまでの（いわゆる第二波）フェミニズムへは相変わらず、違和感の視線も向けられるが、一方でこういった新たな女子の動きは、「あたりまえ」の女性の生き方や行動とはずれていても、世間からはポジティブな評価がなされやすい。これらは、それまでのフェミニズムと、断絶したものなのであろうか。私自身は、前述したような経験から、決してそうは思えない。

この、新しい女性のあり方をめぐり、社会における性別をめぐる構造、すなわちジェンダー構造の変革につ

ながるかどうかについては賛否がある。ポストフェミニズムに関する議論では、新たな女性のあり方は、選択肢が増え女性が主体性を獲得したように見える一方、従来のジェンダー構造から逃れられていない、むしろジェンダー構造の再編成につながる側面があると批判される。私自身は、女性が本当の意味で主体性を獲得し、エンパワーがなされるためには、ジェンダー構造の変革、ジェンダー平等の実現が不可欠であると考えている。なぜなら、そもそも個人の尊重は社会における最重要課題であり、制度や社会意識、規範などそれを阻害するシステムをデフォルトとしたまま、個人のエンパワーだけを求めることは、その原則に背くものであるからである。よって、女性の、すべての性別の個人の自由とエンパワメントのためには、ジェンダー構造への視点は不可欠である。以上の点から、女子の新たな文化、生き方について、ポストフェミニズムの視点からの批判に呼応しつつ、本当の意味での個人の尊重やエンパワメントにつなげるために必要な視点とは何かについて、本稿では考えていきたい。

1. 女子の文化と女性のエンパワメント

ポジティブで新しい「女子の文化」

女子学研究会周辺においても、これまで、「女子」や「カワイイ」をキーワードとし、現代を生きる女性たちの新しい傾向が紹介されてきた。近年、しばしば使用される「女子」という用語は、それまでの「実態とはかけ離れた、男性によって都合のいい隠喩」¹である若い女性のイメージ、「『少女』の代理である『女子』」²、「対象として眼差される客体ではな」³、「年齢を不問とする」「当事者である『女性』自身が自称として使ったいわばグループ名」⁴や、女性の「共感」のためのメディアのイメージであるという。すなわち、女性たちが、あえて選び取った、新たな女性の「嗜好性や行為」⁵の集合もしくは個別のイメージとして「女子」は存在している。「女子」たちは、従来の女性ジェンダー役割に沿って生きるのではなく、生き方や行動を自ら選択し、新たな文化を形成するエンパワーされた存在である。

「女子」たちは、「皆『自分好き』で『めっちゃめっちゃ楽しそう』」「女性に美しさや若さを求める社会の犠牲になっている」わけではなく「自分が輝くため」に頑張っており、また、「『四十代女子』たちは、『良妻賢母という呪縛』から自由になろうとする」⁷「『私に萌える』ためにおしゃれをする」⁸（米澤 2012, 56）。これらのエンパワーされた女子の営みは、「女性たちが使用を許されている限られた言語や資源をもとに、家事労働システムの循環以外の場所に、女性が自分の行動や心理を語り共感しあえる領域を切り開いていく過程」⁹に位置づけられる。

さらに、「女子」たちが獲得した、新たな価値観、評価である「カワイイ」の概念は、「従来の『男性的』とされていた領域」に持ち込まれた「もっと別のセンスや価値観」「オルタナティブ」なものであり、「社会がより多様性を求める時（つまり成熟を目指す時）に必要な感性（の一つ）」¹⁰であると説明される。それまでの、未成熟という意味での「かわいい」ではなく、「『おとこおとな』の成熟とはまた別の成熟を示し

1 馬場伸彦,2012,「はじめに—いままなぜ女子の時代なのか?」馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代!』青弓社,9-16,10.

2 前掲書,11.

3 前掲書,11.

4 前掲書,11.

5 前掲書,11.

6 反橋希美,2017,「『毎日新聞』「現代女子論」を取材して」吉光正絵・池田太臣・西原麻里編著『ポスト〈カワイイ〉の文化社会学』ミネルヴァ書房, 199-200,200.

7 米澤泉,2012,「卒業のない女子高一ファッション誌における『女子』」馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代!』青弓社,37-58,52.

8 前掲書,56.

9 吉光正絵 2013「女子とおっかけ」『女子学研究』vol.3,女子学研究会,59-64,63.

10 池田太臣,2017,「はしがき」吉光正絵・池田太臣・西原麻里編著『ポスト〈カワイイ〉の文化社会学』ミネルヴァ書房, i-vii,iii.

ている」¹¹ものであるという。

女子は「主体」となりえているか

「女子」「カワイイ」といった新たな言葉、価値観、「力」を獲得し「自由」な選択によって生きように見える現代の女性たちであるが、しかしながら彼女らは、従来の、彼女たちの自由を阻害するジェンダー役割から解放された意味での「力」を持つ、「自由」な主体となりえていると言えるのだろうか。その問いについて、ひとまずは、「女子」と関連し、近年頻繁に使用される「女子力」から考えてみたい。

雑誌に登場する用語としての「女子力」について河原は、男性に向けた力や「女性が職場で能力を発揮する場合」¹²など「多義的な内容」¹³で使用される、「広く対社会的な女性の総合能力」を表す「ニュートラルな印象で誰にでも受け入れられやすい、マジックターム」¹⁴であった述べる。押し付けられたジェンダー役割ではなく、自ら選び取った女性の能力として「女子力」は存在する。さらに近藤は、従来の女性的価値に沿う意味であった「女子力」が、「時を経るにつれ、それ以外にも仕事ができること、内面が充実していること、自己主張ができることなど、多様な意味を持つようになる」¹⁵とし、男性だけでなく自分自身や同性の評価も意識したものに变化していると述べる。これらは、女性の主体的な選択による能力である一方、「職場における内発的・強制的な美のことであり、女性が『仕事と家事・育児の二重負担』を負うことを推奨する」「ジェンダー差別的な概念」¹⁶でもあるという。女性にのみ期待される能力である以上「必ずしも女性を有利にするもの」でもなく「問題点が多い」¹⁷と近藤は分析する。

この、主体的な選択に見えつつ、実際には女性のみ期待される役割や価値、能力が存在する構造そのものは変化していないという「女子」を取り巻く社会構造は、女性のエンパワーとしての、「女子」のあり方を考える上で看過できない。菊地は、「女子力」について、「古典的な女性性を、改めて、女性自身が身体化しようと努力するという」「規律訓練的側面」を持つ能力であると述べている¹⁸。すなわち、強制ではなく、女性たちが主体的に、従来のジェンダー役割もしくはそれに類するものを選択している状況が女子力をめぐっては存在している。この、ジェンダーが「強制ではなく選択」になる状況は、「ポストフェミニズム」として、近年、個人の尊重とジェンダー平等という観点から批判されている。エンパワーにつながるとされる女子の新たな生き方、行動は、ジェンダー平等に資するものではないのかについて、次節にて考えていきたい。

2. ポストフェミニズムの視点からの批判

ポストフェミニズムと「女子」

ジェンダーをめぐる状況について近年、ポストフェミニズムの観点からの議論がなされている。ポストフェミニズムとは、「男女平等が達成され」「フェミニズムは正しかった。だがもう必要ない」¹⁹という社会状況を意味する。ポストフェミニズムは、「『競争の自由』を主張しながら、実際には競争の前提となっているさまざまな社会的差異や権力関係は不可視化」²⁰し「女性に課する市場と家庭双方での負担を増大させる」²¹、新

¹¹ 前掲書, iii.

¹² 河原和枝,2012,『『女子』の意味作用』馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代!』青弓社,18-35,23.

¹³ 前掲書,22.

¹⁴ 前掲書,23.

¹⁵ 近藤優衣,2014,『『女子力』の社会学一雑誌の質的分析から一』『女子学研究』vol.4,女子学研究会,24-34,27

¹⁶ 前掲書,33.

¹⁷ 前掲書,33.

¹⁸ 菊地夏野,2019,『日本のポストフェミニズム：女子力とネオリベラリズム』大月書店,87.

¹⁹ 前掲書,74.

²⁰ 前掲書,15.

自由主義的な社会のもと生じている現象である。新自由主義下では「ジェンダーの支配はより巧妙に変化する」²²とされ、日本においては、自由な選択に見える「非正規雇用」や「コース別人事」の問題²³がこれらを導入・反映した結果となっている。菊地は、日本における労働、ジェンダーの法制度について、「実際に起きているのは、さまざまな差別的な規制や構造はそのまま放置あるいは悪化させられ、一方で一定の条件下の女性のみ」の活躍を可能にするものであると述べている²⁴。

この、ポストフェミニズム的状况について、菊地はマクロビーの論を紹介しつつ、「フェミニズムの要素は政治的制度的生活に取り入れられ、『エンパワメント』や『選択』という言葉がより個人主義的な言説は転換され、メディアやポピュラーカルチャーの中で、さらに国家の政策として、それらの言説がある種のフェミニズムの代替として展開されている」²⁵と説明する。そして、「フェミニズムは女性の集合体としての社会的地位の向上を目指したが、ポストフェミニズムにおいてはあくまで個人的な成功に価値がおかれる」²⁶とし、「『個人の選択』や『エンパワメント』等のフェミニズム的な語彙が広がった代わりに、女性たちは新しい女性性を身につけるよう社会的に要請されている」²⁷とジェンダー構造を不問にしたまま、さまざまな問題を女性個人の自己責任で乗り越えるべきとする社会を批判する。ポストフェミニズム的状况は、「すでにフェミニズムの成果ができあがってしまった状況で、それを前提として新たな一ある意味、開き直ったような一女性性が前面に押し出されるという話」²⁸を産む。

以上のようなポストフェミニズムの視点を経た場合、「女子」が、それまでの女性の「あたりまえ」ではない新たな生き方や文化を自ら選択する際、それが本当に主体的な選択となりえているのかには多少の疑義が必要である。たしかに、「女子力」の中でも、とりわけ従来のジェンダーに沿う能力（気遣い、美、性的価値など）が期待される側面があるとするのならば、それはポストフェミニズム的なジェンダー構造の再編成を意味するといえる。しかし、そのようなつながりが明確でない女子の新たな生き方、文化においても、「女子は男子よりもずっと、いざと言うときの行動力と大胆さがある」²⁹、「女性特有の柔軟な思考は問題の解決に影響を与え創造的な次元へと導いていく」³⁰、「『気遣い』や『連帯感』に女性が長けていることは多くの人認める利点」³¹といった、社会にとっての「メリット」を根拠に「女子」を評価するならば、従来の社会を無批判にデフォルト化するポストフェミニズムとの親和性への懸念は残る。また、新しい女性のあり方が、前述のような、「一定の条件下の女性のみ」の活躍を可能にする³²ものであるならば、経済的資源や社会的地位、嗜好も多様な女性間の分断にもつながることとなる（3節で見ると、分断もまたジェンダー構造と密接な関係にある）。栗田は、現代の「女性活躍」について、「いわゆる『女らしさ』を失わず、仕事に熱心に取り組む女性を『キラキラ女子』」と鼓舞する社会の一方「そもそも新卒でずっと勤め上げる人などは今はほんのわずかだし、非正規雇用は増加している」という「落差」³³について述べている。「閉塞した状況下においてさえ、活力を失わなかった」³⁴、女子の「力」は、多様な個人が尊重されるための社会構造の変革につながるエンパワーともなりうるが、それが可能な女子と不可能でない女子との間には、また、「女子力」のようなジェン

21 前掲書,5.

22 前掲書,36.

23 前掲書,46.

24 前掲書,63-64.

25 前掲書,72.

26 前掲書,75.

27 前掲書,96.

28 菊地夏野・河野真太郎・田中東子,2020,「分断と対峙し、連帯を模索する 日本のフェミニズムとネオリベラリズム」『現代思想』vol 48-4,青土社,8-25,11.

29 能町光香,2012,『ニッポン女子力』小学館,167.

30 馬場伸彦,2012,「はじめに—いまなぜ女子の時代なのか?」馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代!』青弓社,9-16,13.

31 前掲書,14.

32 菊地夏野,2019,『日本のポストフェミニズム:女子力とネオリベラリズム』大月書店,63-64.

33 栗田隆子,2019,『ぼそぼそ声のフェミニズム』作品社,69.

34 馬場伸彦,2012,「はじめに—いまなぜ女子の時代なのか?」馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代!』青弓社,9-16,14.

ダー構造を生き抜く能力を活かせる女子、活かさない／せない女子との間には、自己責任や自由意志での選択の名の下、分断が生じることも考えられる。

社会構造に気づき、戸惑う「女子」

しかしながら、女子の生き方、行動、文化には、従来のジェンダー構造をデフォルトとする社会への「違和感やとまどい」³⁵が示されることもしばしばある。女性の鉄道ファンについての記述を例とすると、「女性の鉄道ファンならたとえライトであっても」「コアな鉄道ファンたち」からも「参入を歓迎」され、ハードルが低いままでファンを名乗ることが許されている³⁶という。それは女性ファンの「希少価値」³⁷によるものであるとされるが、ここでの価値とは、男性ファンよりも「知識や関心のあり方が『浅い』」とみなされる³⁸女性のポジション、「電車を見て『かわいい』と反応するような」³⁹女性ジェンダー的価値と無関係ではないよう感じられる。塩見は、女性鉄道ファンはそういった状況を「察知し」「『鉄道ファン』というより大きなカテゴリで自分たちを捉えることで、自らの鉄道サークルメンバーとしてのアイデンティティを構成しよう」としている⁴⁰述べている。このような選択は、ジェンダー構造を不問にするポストフェミニズム的営みと言い切ることも可能かもしれないが、ジェンダーによる扱いの差異に違和を感じたうえでの認知的不協和を解消する女性たちのサバイブの営みであるとも位置づけられるのではないだろうか。

こういったジェンダーの違和感は、例えば男性が中心となる社会活動に女性が参加した際の違和感にも通じる。前述の栗田は、ある社会活動にて、女性である自身の行動が「かわいい」と評されたことについて、「未熟だったり至らないことに対し『かわいい』で済ま」すことは、「結局『バカにしている』ことに他ならない」⁴¹と述べる。そして、「『バカにできる』相手だからこそ私の存在が許されるなんて悲しすぎる」とし、「発言の仕方を手取り足取り教えてくれようとする男性」⁴²も居たと続けている。未熟さ、若さを「かわいい」と愛でる存在、上から目線で説明し、支配する存在として⁴³、新たに文化に参入する女性メンバーを受容するのであれば、主体的に行動したい女子たちにとってそれは、違和や、場合によっては不快として受け止められる。

「女子」の文化と近年のフェミニズム的状况

ポストフェミニズム的状况下にあっても、「女子」の時代は、確実にジェンダー構造への気づきや違和感の表明がなされるようになった時代でもある。「これは差別です！」と声を上げることにはある種の嫌悪感が持たれても、ジェンダーの押しつけに対し「それ嫌だよ」と自然に発せられる時代ではある。それは、ジェンダー構造への異議申し立てであるフェミニズムと、「ふつうの女性」との距離が近づきつつある状況であるともいえる。実際、主に欧米において1980年代以降、それまでのフェミニズム、いわゆる第二波フェミニズムへの疑問や女性の多様性を視野に入れ、ポピュラーカルチャーなども巻き込んだ第三波フェミニズムの「出現」がいわれ⁴⁴、さらに近年では、SNSなどウェブ上や、有名人などがフェミニズム的議論を行う第四波フェミニズ

³⁵ 池田大臣,2017,「はしがき」吉光正絵・池田大臣・西原麻里編著『ポスト〈カワイイ〉の文化社会学』ミネルヴァ書房, i -vii, iii.

³⁶ 信時哲郎,2012,「女子と鉄道趣味」馬場伸彦・池田大臣編著『女子の時代!』青弓社,156-197,176.

³⁷ 前掲書,176.

³⁸ 塩見翔,2013,「大学鉄道サークルにおける女性メンバーたち」『女子学研究』vol.3,女子学研究会,9-12,11.

³⁹ 前掲書,11.

⁴⁰ 前掲書,11.

⁴¹ 栗田隆子,2019,『ぼそぼそ声のフェミニズム』作品社,168.

⁴² 前掲書,168.

⁴³ 相手を無知と決めつけ、上から目線で説明する現象とジェンダーとを関連させた、マンスプレイング (mansplaining) という言葉がある。ソルニットは、「男たちは私に、そして他の女たちに、説教したがる」(Solnit 2014=2018,10)「ここは女の居場所ではないと教えることで、若い女性たちの意志を打ち砕き、沈黙に落とし入れる」(11)、「なんでもない会話のその先には、男性にのみ開かれた空間」「そこには女性は入れない。」(23)と、男性ジェンダーによる説教がホモソーシャルな空間と女性の排除をつくり出すことについて述べている。

ムが話題となっている。田中は、バネット-ワイザーやギルの議論を受け、第四波フェミニズムについて、「ポピュラーフェミニズム」であり、そのポピュラリティを確保するために、第二波のような「怒りを伴うフェミニズムは流行遅れ」であり「集い、群れ、交流するハッピーな消費者たちをしらけさせ、人々のもとに居心地の悪さを呼び込む」として、好まれない風潮があると説明する⁴⁵。それは、「かつてのフェミニズムが主流メディアによる意味をめぐる闘争に敗北してしまっただけを繰り返されないようにと批判的に距離を取ろうとする行為」であるが、フェミニズムを、「受け入れやすく毒のない企業フェミニズム、や男たちと上手くやっていく『融通の利いた』」ものへと「落とし込んでしまっている」という⁴⁶。「集い、群れ、交流するハッピーな消費者」とは、女子の新たな生き方、行動、文化とも重なる部分があると思われるが、新たな文化の中においても、ジェンダー構造への違和感の表明や批判はなされても、深く切り込んだ怒りや構造変革を困難にする状況がある。

「『私たち。女だものね』ではなく、『女子だもんね』と括られ、共感されることによって、恋愛や性に関する話題もまた、『ステレオタイプ的な価値観』からいくぶん解放されるように見える」⁴⁷というように、女子の新たな生き方、行動、文化は、女性個人のエンパワーとなる。一方、それらがジェンダー構造の変革と距離をとるものであるならば、その再編成につながる懸念、すでに主体的な選択が可能な資源を持つ女性とそうでない女性に女性を分断する懸念、そこで示される差別や性規範への違和は強い怒りとされず、ジェンダーを含むその場の力学に回収されてしまう懸念などが考えられる。場合によっては、反ジェンダー平等、反フェミニズムと見なされる。

しかし、それでもなお、ジェンダー構造への違和感が示されることや、個人の欲望、選択や文化のポピュラリティが重視されつつも、ジェンダー構造が遡上に上がり、議論されることは、その変革に何らかの意味を持つ希望もある。繰り返しになるが、ジェンダー平等の実現と、新たな女子のあり方ととりまく状況の架橋を見出すことは、ジェンダー、セクシュアリティを問わない、真の個人の尊重やエンパワメントのためには重要である。

3. 女子の文化がジェンダー平等に資するためには

「女子」がつながることの意味

菊地は、近年のフェミニズムについて、「#MeTooをはじめ、ある個人の女性が頑張って活躍している」「彼女たちがバイト先でのセクハラにNOと言えるようになったりというのは素晴らしいことだし、意味があること」であるが、「女性たちが集団で闘って世界を変えてきたフェミニズムの歴史がすっかり抜け落ちている」ことがポストフェミニズム的であると述べる⁴⁸。そして、「仲間を見つけて安心して、そこから社会に働きかけていくもので、そういうかたちでないとなかなか広がらないし、続かない」⁴⁹のではないかと憂慮する。この菊

⁴⁴ 第三波フェミニズムは、女性の多様性を重視し、第二波フェミニズムを批判的にとらえつつ、第二波からの方法論や議論との連続性を持つ動きであった（参考：Leslie Heywood and Jennifer Drake, 1997, “introduction”, *Third Wave Agenda: Being Feminist, Doing Feminism*. Univ of Minnesota Pr, 1-20.他）とされるが、本稿では詳細には取り上げない。ただ、日本の第三波フェミニズムは欧米に比べ小規模な動きではあったが、LOVE PIECE CLUB のウェブサイト (<https://www.lovepiececlub.com/>) や『インパクション』誌の連載「今月のフェミ的」などが、フェミニズムの新しい側面を示し、流行しかけていた SNS 上にもフェミニズムに関するコミュニティが多く作られていたことは記しておきたい。また、私自身も第三波を自認した活動を少しばかり行っていたこともあった（参考：荒木菜穂, 2009, 「フェミニストはどこにいる？—『駄フェミ屋』という AMAZING JOURNEY」『インパクション』171, 64-67, インパクト出版会.）。

⁴⁵ 田中東子, 2020, 「フェミニズムが『まあまあ』ポピュラーになりつつある社会で」『早稲田文学』2020年春号春号, 早稲田文学会, 118-127, 120.

⁴⁶ 前掲書, 120.

⁴⁷ 河原和枝, 2012, 『『女子』の意味作用』馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代！』青弓社, 18-35, 27.

⁴⁸ 菊地夏野・河野真太郎・田中東子, 2020, 「分断と対峙し、連帯を模索する 日本のフェミニズムとネオリベラリズム」『現代思想』vol 48-4, 青土社, 8-25, 13.

⁴⁹ 前掲書, 13.

地の発言は、『現代思想』vol. 48-4 における対談⁵⁰の中で出されたものであるが、ここでのやりとりに、変革へのヒントが示されているよう感じる。

個人がエンパワーされ、ジェンダー構造にたいし違和感を示し、時として声を上げるだけでは構造の変革に不十分である問題については、前節でも触れた。では逆に言えば、「女子」や、よりフェミニズム的傾向を持つ女性たちの文化の中で、女性の連帯の萌芽を見出していけば、それはジェンダー平等、真の個人の尊重の実現につながるのではないか。

この対談にて田中は、女性の新たな集団化につながる例として、ファンカルチャーを挙げている。「ファンカルチャーや二次創作の世界というのは今の日本において、キャリアか非正規か、既婚か独身か、子どもがいるかいないかといった違いを割とさらっとはねのけて女性たちが集団化できる貴重な空間になっている」⁵¹と述べるが、これは1節で触れた「女子」の文化とも一致する事象である。「『〇〇女子（ガール）』という言葉」は「嗜好対象を媒介にして『仲間意識』を涵養し、他者との関係性を構築する鍵概念」であり女子は「社会的身分や年齢を超えてネットワーク上に結びついていく」⁵²「『男が同じ趣味を持つ者同士で集まると、知識自慢などの競争が生まれるのに、これほどに繋がれるのはうらやましい』と漏らし」た男性の例⁵³、「『女子』には、今日の学校文化が前提としている『男子』『女子』の対等なイメージとともに、女性同士の絆を強く意識させる側面がある」⁵⁴といった、女性が結びつくことによる力もそこには示されている。

前述の対談に話を戻すと、さらに田中は、「そのような結集力をもつファンカルチャーが、社会運動というほど改まったものでなくても、一つの塊として社会を変える影響力をもちうるかもしれない」⁵⁵と述べている。しかしながら、それにたいし、河野は、それらは「ある種の消費者としての連帯」であり、労働者の連帯とは異なり、「階級の分断がすぐさま入ってきてしまう」「いざそこに何らかの分断が入り込んだときに、そのファンカルチャーコミュニティは果たして耐えられるのか」⁵⁶と疑問を呈する。田中もまた、女性たちが SNS など「少しずつフェミニズム的な発言をはじめたり、女性たちの困難について互いに話し合う」⁵⁷様子に触れつつも、「それ以外の女性の集団化について考えることは難しい」⁵⁸と苦悩を示す。この、分断が起こりうるきっかけとして対談では、政治的発言をめぐってのやりとりが挙げられているが、政治に関する意識や政治との距離、階級意識を含めた差異、相互の尊重を阻害する分断をどう考えていくかが、女子の文化が真のエンパワーにつながるかどうかの課題となってくるのではないか。『女性のみが気遣い求められるなんておかしい』『女性だけがなぜこんな思いをしなければいけないのか』と、「仕方ないとせず、まずは語り合える状況が作られる」だけでも、意義はある⁵⁹が、そこから連帯につなげていくためには、もう一歩踏み込まなくてはならない。

分断を乗り越える政治

この、女性間の差異については、フェミニズムは古くから重要なテーマとして扱ってきた。もとよりジェンダー構造は、女性を分断することで維持されてきた。多くの権力構造がそうであるように、「『分割して統治

⁵⁰ 前掲書,8-25.

⁵¹ 前掲書,15.

⁵² 馬場伸彦,2012,「はじめに—いまなぜ女子の時代なのか?」馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代!』青弓社,9-16,12.

⁵³ 反橋希美,2017,『毎日新聞』「現代女子論」取材して」吉光正絵・池田太臣・西原麻里編著『ポスト(カワイイ)の文化社会学』ミネルヴァ書房, 199-200,200.

⁵⁴ 河原和枝,2012,『女子』の意味作用」馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代!』青弓社,18-35,27.

⁵⁵ 菊地夏野・河野真太郎・田中東子,2020,「分断と対峙し、連帯を模索する 日本フェミニズムとネオリベリズム」『現代思想』vol 48-4,青土社,8-25,15.

⁵⁶ 前掲書,15.

⁵⁷ 前掲書,15.

⁵⁸ 前掲書,15.

⁵⁹ 荒木菜穂,2019,「現代日本のジェンダー・セクシュアリティをめぐる状況とこれからのフェミニズムについて考える〜菊地夏野著『日本のポストフェミニズム:女子力とネオリベリズム』を読んで」『女性学年報』40号,日本女性学研究会,45-51,50.

せよ (divide and rule) 』。それが支配の鉄則だ。分断しておいて、互いに対立させる。そのあいだに『連帯』など、もつてのほか。」⁶⁰というように。上野はこの女性間の分断構造について、「男による『聖女』と『娼婦』の分断支配」「それに加えて、階級や人種の亀裂が入る」と述べている⁶¹。一方で男性同士は、「女を性的客体とすることを互いに承認することによって、性的主体間の相互承認と連帯が成立」し、そこには「女を自分たちと同等の性的主体とはけっして認めない」「女性の客体化・他者化」「女性蔑視」が存在する⁶²。

女子の文化がジェンダー平等と親和性を持つならば、男性ジェンダーによるものも含む女子の文化へのまなざし、すなわち、このような「客体化」やミソジニー、「かわいげ」を求めたりケア役割を当然としたりするまなざしが変わっていかなければならない。変化を問われているのは、「男子」のほうでもあることは忘れてはならない。

さて、女子の文化が、女子の連帯、すなわち「女性の分断」への抵抗へと結びつくのであれば、少なくともそれはジェンダー構造への抵抗を意味するのではないか。前述のような差異と分断に関する困難は、実際のフェミニズムの活動においても長らく議論や実践の中で問われてきたことである。それは、「現実に女性同士が向き合う際、その『隣の女性』と『私』との同一性と差異をどのように考えるのか、という問題」となる⁶³。日本における第二波フェミニズムのグループにおいても、「異なった立場の他者への配慮を可能とするコミュニケーションが、まず重視」され、そこは「異なった女性のポジショナリティへの想像力を持つ女性の主体を創る場」ともなっていた⁶⁴。

近年の「新しい」フェミニズムや「女子」の文化は、怒り、強く主張するフェミニズムのあり方から距離を置く傾向があるとされているが、冒頭での述べたように、第二波フェミニズムもまた、「声を上げる」のみならず、女性たちが互いに語り、女性役割を気にせずともに活動を楽しむ「女子の文化」であった側面もある。コンシャスネスレイジングにて、互いの経験を語り合い、共感し、「個人的なことは政治的」だと、すなわち、わたしが苦しんでいること、社会への違和は、決して自分の失敗や運の悪さだけではなく、社会構造の問題なのだ、気づいてきた。

いまいちど、一元的なイメージではない、これまでのフェミニズムの営みを、またはフェミニズムが向き合ってきた差異と分断の調整や尊重や対話の営みを知り考える、という機会が多くもたれて欲しいと思う。そのような機会は、「女子の文化」をもまた、豊かにしていくものではないだろうか。キャリアを積む女子、非正規の女子、子どもやパートナーのいる女子、いない女子、さまざまなセクシュアリティの女子、女子の多様性が自明視された現代であるからこそ、ジェンダーの「あたりまえ」がまだまだある社会で、オルタナティブとして豊かな女子の文化を育てていくためには、意義があるのではないかと思う。

田中は、Twitter を例に挙げ「現代文化におけるジェンダーの関係についてインターセクショナルな分析を行う投稿など、『ポピュラリティ』へと収斂していくことのない別のフェミニスト政治の可能性を再想像することを可能にする現場にもなりえ」ている⁶⁵と述べる。また栗田は、「女性たちが、声を出すこと、自分たちの差を尊重し、批判があつたときには声を潰さず、声を聞き分裂しないやり方」が「社会構造を問うことにつながる」とし「関係の作り方、合意の作り方、表現の仕方、批判の向き合い方」を考えることの必要性を述べている⁶⁶。

「女子」たちが互いの分断を超え、同様にジェンダーへの違和や自身の変革を意識した「男子」たちとも向

⁶⁰ 上野千鶴子,2010,『女ざらいーニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店,43.

⁶¹ 前掲書,43.

⁶² 前掲書,29.

⁶³ 荒木菜穂,2018,「日本の草の根フェミニズムにおける『平場の組織論』と女性間の差異の調整」牟田和恵編『架橋するフェミニズム：歴史・性・暴力』松香堂書店, 37-50,40.

⁶⁴ 前掲書,47.

⁶⁵ 田中東子,2020,「フェミニズムが『まあまあ』ポピュラーになりつつある社会で」『早稲田文学』2020年春号春号,早稲田文学会,118-127,121.

⁶⁶ 栗田隆子,2019,『ぼそぼそ声のフェミニズム』作品社,97.

き合い、ジェンダー構造を可視化し批判、変革していく未来を想像することをあきらめたくはない。そのためには、ジェンダー構造を自明とするのではなく、多様な他者や、他者の事情への想像力（すなわち社会構造への想像力）が、「女子」「男子」「フェミニズム」すべての局面において重視されることが求められる⁶⁷。

【参考文献】

- 荒木菜穂, 2018, 「日本の草の根フェミニズムにおける『平場の組織論』と女性間の差異の調整」 牟田和恵編『架橋するフェミニズム：歴史・性・暴力』松香堂書店, 37-50.
- 荒木菜穂, 2019, 「現代日本のジェンダー・セクシュアリティをめぐる状況とこれからのフェミニズムについて考える～菊地夏野著『日本のポストフェミニズム：女子力とネオリベラリズム』を読んで」『女性学年報』40号, 日本女性学研究会, 45-51.
- 馬場伸彦, 2012, 「はじめに一いまなぜ女子の時代なのか？」 馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代！』青弓社, 9-16.
- Heywood, Leslie and Jennifer Drake, 1997, “introduction”, *Third Wave Agenda: Being Feminist, Doing Feminism*. Univ of Minnesota Pr, 1-20.
- 池田太臣, 2017, 「はしがき」 吉光正絵・池田太臣・西原麻里編著『ポスト〈カワイイ〉の文化社会学』ミネルヴァ書房, i-vii.
- 河原和枝, 2012, 「『女子』の意味作用」 馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代！』青弓社, 18-35.
- 菊地夏野, 2019, 『日本のポストフェミニズム：女子力とネオリベラリズム』大月書店.
- 菊地夏野・河野真太郎・田中東子, 2020, 「分断と対峙し、連帯を模索する 日本のフェミニズムとネオリベラリズム」『現代思想』vol 48-4, 青土社, 8-25.
- 近藤優衣, 2014, 「『女子力』の社会学—雑誌の質的分析から—」『女子学研究』vol. 4, 女子学研究会, 24-34.
- 栗田隆子, 2019, 『ぼそぼそ声のフェミニズム』作品社.
- 信時哲郎, 2012, 「女子と鉄道趣味」 馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代！』青弓社, 156-197.
- 能町光香, 2012, 『ニッポン女子力』小学館.
- 反橋希美, 2017, 「『毎日新聞』「現代女子論」を取材して」 吉光正絵・池田太臣・西原麻里編著『ポスト〈カワイイ〉の文化社会学』ミネルヴァ書房, 199-200.
- Solnit, Rebecca, 2014, *Men Explain Things to Me: And Other Essays*, Granta Books. (=ハーン小路恭子訳, 2018, 『説教したがる男たち』左右社.)
- 塩見翔, 2013, 「大学鉄道サークルにおける女性メンバーたち」『女子学研究』vol. 3, 女子学研究会, 9-12.
- 田中東子, 2020, 「フェミニズムが『まあまあ』ポピュラーになりつつある社会で」『早稲田文学』2020年春号春号, 早稲田文学会, 118-127.
- 上野千鶴子, 2010, 『女ざらい—ニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店
- 米澤泉, 2012, 「卒業のない女子高一ファッション誌における『女子』」 馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代！』青弓社, 37-58.
- 吉光正絵 2013 「女子とおっかけ」『女子学研究』vol. 3, 女子学研究会, 59-64.

⁶⁷ 現状のような観戦や災害など社会的リスクの高い時期には、個人間の際が、しばしばさらに深刻な分断につながる。社会構造への想像力は、それらを乗り越えるヒントにもつながるのではないかと考える。